

# 接触場面における母語話者の情報やりとりの特徴の記述

## — 情報やりとりの発話カテゴリーの設定に向けて —

柳田 直美

### 要 旨

本稿では、接触場面における情報やりとりの過程に着目し、情報やり場面と情報とり場面における母語話者の言語行動の特徴を記述するための発話カテゴリーを設定することを目的として、同年代の母語話者・非母語話者の情報共有タスク実施時の会話資料分析を行った。その結果、情報やり場面の発話カテゴリーには、「情報提供」と「意味交渉」を設け、さらに「意味交渉」の下位カテゴリーとして「非母語話者のための理解促進発話」と「非母語話者に対する理解確認発話」を設定した。次に、情報とり場面の発話カテゴリーには、「情報要求」、「共有表明」、「意味交渉」を設け、さらに、意味交渉の下位カテゴリーとして「母語話者自身の理解促進発話」と「非母語話者に対する援助発話」を設定した。情報共有タスクの分析から設定したこの発話カテゴリーは、接触場面における母語話者の情報やりとりの特徴を表すことができると考える。

【キーワード】 接触場面 母語話者 情報やりとり 意味交渉 発話カテゴリー

## The Sharing Information Process of Japanese Native Speakers in Contact Situation: for setting the category of utterance

YANAGIDA Naomi

【Abstract】 In this study, the sharing information process in a contact situation between native and non-native speakers was analyzed, aiming to set the utterance category to describe the features of native speaker's language behavior in the giving information and the receiving information scene. As the result, the utterance categories of sharing information were set as follows. In the giving information scene, the categories were “Information” and “Negotiation of Meaning” and in the receiving information scene, “Questioning”, “Expressions Sharing Information” and “Negotiation of Meaning”. These categories are able to describe the sharing information process of native speakers in a contact situation.

【Keywords】 contact situation, sharing information process of native speakers, Negotiation of Meaning, utterance category of sharing information

## 1. はじめに

言語教育において、学習の目標とされる言語行動は、その言語の母語話者同士の場面の言語行動である。もちろん、目標言語の学習に当たっては、母語話者同士の言語行動が基準となるのは当然であろう。しかしながら、佐々木 (2006) が、「外国語で話す場面は必ずや異文化間コミュニケーション場面であるという視点が、少なくともこれまで外国語教育研究においてあまり考慮されてこなかった」と述べているとおり、学習者が接する日本語使用場面は、すべてが母語話者と非母語話者の接触場面 (ネウストプニー、1985)、もしくは学習者同士の場面であり、母語場面にはなりえない。

これまでの研究によって、接触場面において母語話者は非母語話者と会話する際、母語話者同士の場面とは異なった言語行動をとることが明らかになってきており (Long1983、Larsen - Freeman & Long1991、志村 1989、ロング 1992、岡崎 1994、御館 1998、一二三 2002、佐々木 2006 など)、このことから考えても、学習者にとって、接触場面における母語話者の言語行動を知ることが、母語話者の母語場面における言語行動を学習することと同様に、コミュニケーションを円滑に進める上での示唆を与えることになると思われる。

しかし、接触場面の母語話者の言語行動と一口に言っても、さまざまな場面が考えられ、行われる言語行動は多岐にわたる。

そこで本稿では、接触場面における「情報やりとりの過程」、つまり、話し手が聞き手に情報を提供し、話し手と聞き手がその情報を共有するまでの情報共有の過程に着目し、接触場面において母語話者が非母語話者に情報を提供する場面を「情報やり場面」、母語話者が非母語話者から情報を受け取る場面を「情報とり場面」とし、両場面における母語話者の情報やりとりの特徴を記述するための発話カテゴリーを設定することを目的とする。

## 2. 分析方法

### 2.1 録音調査手順

母語話者と非母語話者がお互いに持っている情報を相手に伝え合い、ひとつの情報を完成させる情報共有の過程を分析するために、インフォメーションギャップタスクを実施した。インフォメーションギャップタスクは「目的性の高い会話 (結論を出す必要のある会話)」 (一二三、2002) であり、目的を設定することによって、母語話者と非母語話者が情報共有までに行う言語行動の過程を観察することを試みる。

会話録音調査は 2003 年 6 月から 7 月にかけて、筑波大学において以下の手順で行った。

まず、初対面の母語話者と非母語話者の自己紹介のあと、緊張を和らげるために数分間の自由会話時間を設けた。その際、非母語話者には母語話者の接触経験に関する情報は一

切与えなかった。また、母語話者には非母語話者の日本語能力に関する情報は一切与えなかった。

次に、短編コメディ「Mr.Bean」(全5分程度)の前半部分を母語話者に、後半部分を非母語話者にそれぞれ2回ずつ見せ、内容を記憶するように指示した。ビデオ視聴後、お互いにできるだけ詳しく情報を伝え、わからないことがあったら遠慮せずになんでも相手に聞くこと、緊張せず友達に話すようにリラックスして話すように伝え、会話を録音した。会話では、ビデオの前半部分を視聴した母語話者が非母語話者に情報を提供後、ビデオの後半部分を視聴した非母語話者が母語話者に情報を提供し、録音終了後、両者に別々に前半・後半を通した全体のあらすじを書くタスクを課した。

会話録音データの録音時間はそれぞれ5分～10分程度で、母語話者と非母語話者の情報やりとりの総発話数は4816であった。

## 2.2 調査協力者の属性

調査協力者のうち、母語話者は日本語教授経験のない大学・大学院生20名で、女性10名、男性10名である。対話者となる非母語話者は中・上級日本語学習者<sup>15</sup>名で、全員女性である。母語はタイ語、ロシア語、中国語、韓国語、朝鮮語である。

非母語話者は母語話者の女性2名、男性2名、計4名と会話を行った。なお、非母語話者のタスクに対する学習効果を避けるため、視聴した映像はすべて異なる。表1に母語話者と非母語話者の組み合わせを示す。

【表1】調査協力者の組み合わせ

NNS	nnsA		nnsB		nnsC		nnsD		nnsE	
NS	nsA	女	nsE	女	nsI	女	nsM	女	nsQ	女
	nsB	男	nsF	男	nsJ	男	nsN	男	nsR	男
	nsC	女	nsG	女	nsK	女	nsO	女	nsS	女
	nsD	男	nsH	男	nsL	男	nsP	男	nsT	男

NNS：非母語話者、NS：母語話者  
nnsA～nnsE：非母語話者の個別記号、nsA～T：母語話者の個別記号

## 2.3 分析方法

会話資料の分析に当たり、本稿では一二三(2002)の発話カテゴリーをもとにする。また、分析を進めながら、接触場面における母語話者の情報やりとりの特徴を記述するために、一二三(2002)の発話カテゴリーに修正を加え、最終的に「接触場面における母語話

者の情報やりとりの発話カテゴリー」を設定することを試みる。次節では、一二三の発話カテゴリーについて述べる。

## 2.4 発話カテゴリー

浦他(1986)は、日本語母語話者同士の会話の分析から、会話を会話の参加者による情報の共有と合成・加工ととらえ、発話の分類カテゴリーを提案している。一二三(2002)は、日本語母語話者と非母語話者の接触場面における発話内容面の処理を分析するために、浦他の発話の分類カテゴリーに調整を加えたものを設定した。一二三の発話カテゴリーを表2に示す。

【表2】発話カテゴリー (一二三、2002)

---

情報の共有 (IS: Sharing Information)
情報要求 (Q: Question)
情報提供 (INF: INFormation)
意味交渉 (NM: Negotiation of Meaning)
情報の合成・加工 (IP: Processing Information)
意見 (OP: OPinion)
評価 (EV: EValuation)
相槌 (実質的内容なし) (NSP: Not Sharing nor Processing)
無反応 (沈黙) (NR: Non Reaction)

---

\*アルファベット大文字はコーディング記号

一二三の発話カテゴリーには、「情報の共有」、「情報の合成・加工」、「相槌 (実質的内容のない発話)」、「沈黙を含めた無反応」が上位カテゴリーとして設定されている。さらに、「情報の共有」の下位カテゴリーとして「情報要求」、「情報提供」、「意味交渉 (何らかの原因で会話が中断したとき、相手に聞き返したり、自分の理解をチェックしたりする相互交渉)」が、「情報の合成・加工」の下位カテゴリーとして「意見 (共有された情報に関して自己の情報を論理的に関連づける発話)」、「評価 (共有された情報に対して事故の情報を情緒的に関連づける、反応的な発話)」が設けられている。

以下、発話カテゴリーにもとづいて会話資料の分析を進めながら、接触場面における情報やりとりの過程を記述するために、一二三の発話カテゴリーに修正を加えていきたい。

### 3. 発話カテゴリーの修正

#### 3.1 上位カテゴリーの修正

一二三（2002）のカテゴリーに従った、母語話者発話総数における情報やり場面と情報とり場面の各カテゴリー別出現頻度を表3に示す。発話カテゴリーの出現頻度の集計にあたり、録音資料を文字化<sup>2</sup>し、一発話ごとに出現頻度をカウントし、集計した。集計の結果、母語話者の発話総数は情報やり場面が1217、情報とり場面が1112であった。

【表3】各カテゴリー出現頻度結果

	情 報 の 共 有			情報の合成・加工		相 槌	無 反 応	理解表明
	情報要求	情報提供	意味交渉	意 見	評 価			
情報やり	1	702	415	0	0	96	0	3
情報とり	53	4	404	0	0	628	0	23

会話資料において情報共有過程部分のみに着目した結果、発話カテゴリーのうち、情報の合成・加工は出現せず、無反応も見られなかった。

一方、発話資料からカテゴリーに分類されない「わかりました」「大丈夫です」などの理解表明の発話が観察された。浦他（1986）は、情報の合成・加工（意見・評価）は、情報の共有後に行われるとしている。そのため、情報を共有したことを表す「わかりました」「大丈夫です」などの発話は、情報の合成・加工（意見・評価）とは異なり、カテゴリーに分類することができない。

ここで、もうひとつの発話カテゴリーである「相槌」に注目したい。一二三は相槌を「実質的内容のない発話」としているが、堀口（1997）は、あいづちは、「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」であるとしている。「わかりました」「大丈夫です」などの発話は、あいづちと同じように話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現であり、しかもその積極性はあいづちよりも強いと考えられる。

よって本稿では、情報を共有したことを示す発話カテゴリーとして、「共有表明」のカテゴリーを設定することとする。このうち、情報の共有を伝えるあいづち詞を使用した発話を「あいづち」とし、情報の共有をより積極的に伝える発話を「非母語話者に対する理解表明発話」として下位カテゴリーとする。

#### (1) あいづち（Back Channels：BC）

相手に聞いていることを伝える、わかったということを伝える、話の進行を助ける発話。

本稿では「あいづち詞」を使用した発話のみを扱い、堀口 (1997) があいづちとしている相手の発話の繰り返し、言い換え、先取りは含めない。

nns	じゃこっちが悪いかもしれないから、
ns	ああー。
nns	吸引器こうもって、
ns	ええ。
nns	また、なんか数えてて、あ、も、こっちだ、か、またやっついて、
ns	ん。
nns	薬をぬ、塗、っていて、
ns	はい。
nns	で終わったらー、
ns	ん。
nns	今度はなんか上下?? キュッと、下に行っちゃっ (〈笑い〉) たんです。

(2) 理解表明 (Comprehension Expressions : CE)

あいづち詞以外の言語形式を伴って、相手の発話を理解したことを積極的に表す発話。

nns	で、後半の部分は、わかりましたか？。
ns	そうですね、ええ、だいたい、わかりましたね、えええええええ。

以上をふまえ、本稿における接触場面の母語話者の情報やりとりの発話カテゴリーは、「情報の合成・加工」と「無反応」を除き、「情報要求」、「情報提供」、「意味交渉」、「共有表明」(あいづちと理解表明) を設けることとする。表4に以上をまとめた情報やりとりの発話カテゴリーを示す。

【表4】接触場面における母語話者の情報やりとりの発話カテゴリー

---

情報要求 (Q)
情報提供 (INF)
共有表明 (SE : Expressions of Sharing information)
あいづち (BC)
非母語話者に対する理解表明発話 (CE : Expressions of Comprehension)
意味交渉 (NM)

---

### 3.2 情報やり場面と情報とり場面におけるカテゴリ別出現頻度

次に、情報やり場面、情報とり場面の特徴を明らかにするために、各カテゴリの出現頻度を比較する。表4のカテゴリに従った、情報やり場面と情報とり場面の各カテゴリ別出現頻度結果を表5に示す。

【表5】各カテゴリ出現頻度結果

	情報要求 (Q)	情報提供 (INF)	共有表明 (SE)	意味交渉 (NM)
情報やり	1	702	99	415
情報とり	53	4	651	404

情報やり場面と情報とり場面で、各カテゴリの出現頻度に偏りがあるかをみるために表5について $\chi^2$ 検定を行った結果、統計的に有意な偏りがあることがわかった ( $\chi^2(3) = 1146.176$ 、1%水準)。そこで、どの項目がこの有意性に貢献したのかを判定するため、残差分析を行った(表6)。その結果、情報やり場面では情報提供が多く出現するのに対し、情報とり場面では情報要求、共有表明が多く出現することが明らかになった。一方、意味交渉の出現頻度に関しては、有意差は見られなかった。

【表6】残差の一覧表

	情報要求 (Q)	情報提供 (INF)	共有表明 (SE)	意味交渉 (NM)
情報やり	- 7.503 **	30.064 **	- 26.005 **	- 1.126 ns
情報とり	7.503 **	- 30.064 **	26.005 **	1.126 ns

† p<.10      \* p<.05      \*\* p<.01      ns : not significant

以上の結果から、情報やり場面、情報とり場面において母語話者が使用する発話カテゴリは、表7、表8のようにまとめられる。

【表7】情報やり場面の発話カテゴリー

---

情報提供 (INF)  
意味交渉 (NM)

---

【表8】情報とり場面の発話カテゴリー

---

情報要求 (Q)  
共有表明 (SE)  
意味交渉 (NM)

---

上記発話カテゴリーの出現頻度結果から、情報やり場面と情報とり場面での意味交渉の出現頻度に差は見られなかった。しかし、両場面において出現した意味交渉の発話内容には、本当に差がないのだろうか。そこで次に、意味交渉の発話機能別出現頻度結果から、情報やりとり場面で現れる意味交渉発話の特徴を分析する。

### 3.3 下位カテゴリーの修正：意味交渉

本節では、意味交渉（NM）の発話機能別出現頻度結果から、情報やりとり場面で現れる意味交渉発話の特徴を分析する。意味交渉とは、何らかの原因で会話が中断、もしくは中断が予測されるときに、その中断を修復・予防するための発話であり、これまでの研究からさまざまな意味交渉の方法が明らかになっている（Scarcella and Higa1981、Long1983、村上 1997、増井 2002 など）が、本会話資料の情報やりとり場面を分析した結果、以下の10項目が観察された。以下、発話例とともに示す。

#### (1) 訂正（EC：Error Corrections）

言語形式および内容に関して相手の不適切な言い回しを訂正する発話。

nns	動いていっ〈て・・・。〉 }
ns	〈近〉 } 寄って行って、〈はい。〉 {

#### (2) 貢献・完成（CON：CONtributors）

話し手が適当な語彙や表現を探せないでいるときに、聞き手がその言葉を予想して、相手の発話を引き取って、代わりに発話して完成させる発話。

nns	〈お医者さん、〉 } 歯医者さんが一、準備をしているあい、とき、間に一、〈あ、ミスタービーンは・・・。〉 {
ns	〈うん、いろいろ遊んでいる。〉 }
nns	はい一、遊ん、でいて、

#### (3) 確認チェック（CON.C：CONfirmation Checks）

話し手の発話を聞き手が正しく理解しているかどうか、聞き手自身が話し手に確認する発話。話し手の発話があいまいであったものを聞き手自身が言うことによって、あるいは質問形式で確認したり、聞き手が話し手の発話の全部、または一部をくり返したりして、話し手の発話に対する自分の理解を確認する。聞き手側は話し手からの情報に関して自分の理解があった上で、それが正しいかどうかを確認する。

nns	そう思って、だからもう〈笑いながら〉、下から一、〈ん〉\{\}
ns	〈下?。〉\{\}
nns	ほ、下、うん〈うん。〉\{\}

(4) 明確化要求 (CR : Clarification Requests)

聞き手が話し手の発話を理解できないときやよく聞こえないときに、相手に発話を明確にするように要求する発話。Open question の形をとることが多い。確認チェックと異なる点は、聞き手側には自分なりの理解がないままに話し手の発話を要求するという点である。

ns	ぬいぐるみ、ぬいぐるみー、ぬいぐるみは彼のお気に入りのぬいぐるみなんですかね?。
nns	ぬいぐるみって?。

(5) 承認 (AC : ACknowledgements)

相手の推測や問いかけに肯定的返答を与える発話。相手の確認チェックに対してよく用いられ、「そうそう。」「そうです。」などの表現が用いられる。

ns	でまあそれでいろいろ考えて、でその後半に〈はい〉、〈その、〉\{\} いろんな作戦をやったってことです〈よね?。〉\{\}
nns	〈そうそう。〉\{\}

(6) 否認 (NR : Negative Responses)

相手の推測や問いかけに否定的返答を与える発話。相手の確認チェックに対してよく用いられる。

ns	〈そのまま、〉\{\} 入れて、そのあとズボンをまた出してくる。
nns	いいえ。

(7) 理解チェック (COMP. C : COMPrehension Checks)

相手が自分の話を理解しているかどうか、確認する発話。Long (1983) によれば、このような理解の確認は、コミュニケーションの破綻を回避するための方略であり、普通の母語話者同士の会話よりも接触場面においてその頻度が高いとされている。

ns	歯医者さんです。
nns	はい、〈歯医者さん。〉\{\}
ns	〈わかりますか?、〉\{\} 歯医者さん。
nns	はい、〈わかります。〉\{\}

## (8) 自己発話の修正 (SM: Self Modifications)

自分の発話を、相手の理解を促進するために、相手の要求によって、または自発的に別の言葉に言い換えたり、要約したり、説明したりする発話。相手の要求による発話修正と相手の要求によらない自発的な発話修正のどちらも自己発話の修正として扱う。

ns	ん、で、そのとき、彼は、口を開けて、で、先生はその口をあの、キューっと吸い取る、えっとー、なんていうんですかね、吸引器っていうー、
nns	吸引器、あなんか、〈音一〉 〈
ns	〈バキューム〉 } っていうんですね???
nns	音が出る、その機械?。
ns	え、あの、つばとかをこうクーっと取る、

## (9) 反応要求 (RR: Reaction Requests)

自分の発話に対する相手の反応を要求する発話。本稿では三宅(1996)の「確認要求的表現」に、明らかに質問の意味はないが上昇イントネーションなどをともなって相手に何らかの反応を要求していると考えられる発話を加え、「反応要求」とする。

ns	うん、で、まあこ、治療台に、ありますよね???
nns	はい。
ns	座りますよね???
nns	はい。

## (10) 援助要求 (SR: Support Requests)

適切な語彙や表現が見つからないときに、相手に援助を求める発話。

nns	うん、それとー、／少し間／うん、／沈黙 3秒／と、それで、なんか、ううー、それを全部入れては、はみはみ、歯磨きじゃない、
nns	あれなんと言うんですか?。

次に、これら意味交渉の発話機能10項目について、情報やり場面、情報とり場面それぞれの出現頻度結果を使用頻度の多い順に表9に示す。

表9から明らかなように、情報やり場面と情報とり場面において使用される意味交渉の方法には明らかな違いが見られた。

情報やり場面において、母語話者は、非母語話者の理解を促進するために、非母語話者の要求に応じて、または自発的に自己発話の修正(SM)を行ったり、非母語話者から発話内容の理解確認が行われた際には、承認(AC)で応答したりしているといえる。さらに、非母語話者が提供した情報の内容を理解しているかどうかについては理解チェックによっ

て直接的に確認したり、反応要求によって間接的に確認したりしていることがわかる。

そこで、情報やり場面の意味交渉の下位カテゴリーとしては、以下の2項目を設ける。まず、非母語話者の理解を促進するために行われる自己発話の修正と承認・否認について、「非母語話者のための理解促進発話」とする。否認は上位には入っていないが、その機能は承認と同じであると考えられるので、同グループに分類する。次に、非母語話者の理解を確認するために行われる理解チェック、反応要求は「非母語話者の理解チェック発話」とする。

一方、情報とり場面において、母語話者は非母語話者の発話を理解したり、非母語話者から正確な情報を引き出したりするために、非母語話者からの情報を自分が正しく理解しているかどうか確認チェックをしたり、明確化要求によってあいまいな部分を明らかにするよう努めていることがわかる。また、非母語話者が適切な言葉が見つからずに困っているときは、貢献・完成で非母語話者に対する発話援助をしているといえる。

そこで、情報とり場面の意味交渉の下位カテゴリーとしては、以下の2項目を設ける。まず、非母語話者の発話内容について母語話者側が自分の理解が正しいかどうか確認する確認チェックと明確化要求は同様の機能を持つと考えられるので「母語話者自身の理解促進発話」とする。また、非母語話者が困っているときに援助する貢献・完成を「非母語話者に対する援助発話」とする。

【表 9】意味交渉の発話機能別出現頻度結果

情報やり場面			情報とり場面		
順位	発話機能	出現頻度	順位	発話機能	出現頻度
1	自己発話の修正 (SM)	191	1	確認チェック (CON.C)	270
2	反応要求 (RR)	76	2	貢献・完成 (CON)	75
3	承認 (AC)	60	3	自己発話の修正 (SM)	22
4	理解チェック (COMP.C)	47	4	明確化要求 (CR)	15
5	確認チェック (CON.C)	17	5	承認 (AC)	14
6	貢献・完成 (CON)	11	6	訂正 (EC)	4
7	訂正 (EC)	4	7	理解チェック (COMP.C)	3
8	明確化要求 (CR)	4	8	反応要求 (RR)	1
9	否認 (NR)	4	9	援助要求 (SR)	0
10	援助要求 (SR)	2	10	否認 (NR)	0

以上から、情報やり場面、情報とり場面で母語話者が使用する意味交渉の方法は、表10、表11のようにまとめられる。

【表10】情報やり場面における意味交渉の下位カテゴリー

非母語話者のための理解促進発話（自己発話の修正、承認・否認）
非母語話者に対する理解確認発話（理解チェック、反応要求）

【表11】情報とり場面における意味交渉の下位カテゴリー

母語話者自身の理解促進発話（確認チェック、明確化要求）
非母語話者に対する援助発話（貢献・完成）

本節では、意味交渉の発話に関して情報やり場面と情報とり場面でどのような差があるかを分析し、その結果、表10と表11のような分類を行った。次節では、接触場面における母語話者の情報やりとりへの男女差の影響を分析し、これまでの分類の妥当性を検証する。

#### 3.4 母語話者の情報やりとり発話における男女差

本節では、母語話者の情報やりとりの特徴に男女差が見られるかどうかを分析する。まず、情報やりとりの発話カテゴリー（表4）に従って、出現頻度数の男女差を見るためにウィルコクソンの順位和検定<sup>3</sup>を行った（表12、表13）。

検定の結果、情報やり場面、情報とり場面ともに発話カテゴリー別の出現頻度に差は見られなかった。

【表12】情報やり場面発話カテゴリー別出現頻度：ウィルコクソンの順位和検定

発話カテゴリー	性別	出現頻度	平均値（標準偏差）	p 値
情報要求（Q）	女性	0	0 (0)	—
	男性	1	0.1 (0.3)	
情報提供（INF）	女性	337	33.7 (17.0)	0.508 ns
	男性	365	36.5 (11.0)	
共有表明（SE）	女性	50	5 (4.6)	0.678 ns
	男性	49	4.9 (7.4)	
意味交渉（NM）	女性	218	21.8 (17.4)	0.575 ns
	男性	197	19.7 (11.3)	

† p<.10      \* p<.05      \*\* p<.01      ns : not significant

【表 13】 情報とり場面発話カテゴリー別出現頻度：ウィルコクソンの順位和検定

発話カテゴリー	性別	出現頻度	平均値（標準偏差）	p 値
情報要求（Q）	女性	37	3.7 (3.7)	0.114 ns
	男性	16	1.6 (1.3)	
情報提供（INF）	女性	3	0.3 (0.5)	0.361 ns
	男性	1	0.1 (0.3)	
共有表明（SE）	女性	298	29.8 (17.2)	0.333 ns
	男性	353	35.3 (19.4)	
意味交渉（NM）	女性	172	17.2 (9.0)	0.11 ns
	男性	232	23.2 (16.2)	

† p<.10      \* p<.05      \*\* p<.01      ns : not significant

次に、意味交渉の発話の発話機能別出現頻度に男女差が影響するかを見るために、ウィルコクソンの順位和検定を行った（表 14、表 15）。

検定の結果、情報とり場面において、確認チェックについては男性が女性より多く使用する傾向があることがわかった。

しかし、確認チェックは、全体の頻度分析結果では出現数が少なく、情報やり場面の意味交渉の分類に含まれていないため、カテゴリーの設定上は、考慮する必要がない。よって、この結果は情報やり場面の意味交渉の分類（表 10）を覆すものではないと考えられる。

一方、情報やり場面においては有意差が見られなかったことから、分類の妥当性を認めることができるだろう。

以上の結果から、男女間においては情報やり場面の確認チェックの使用傾向に若干の差が見られるものの、全体としては意味交渉の下位カテゴリーの分類（表 10、表 11）に沿ったものであるということが出来る。

【表 14】情報やり場面意味交渉の出現頻度：ウィルコクソンの順位和検定

発話カテゴリー	性別	平均値	(標準偏差)	p 値
訂正 (EC)	女性	0.3	(0.67)	0.41ns
	男性	0.1	(0.32)	
貢献・完成 (CON)	女性	0.8	(1.32)	0.40 ns
	男性	0.3	(0.67)	
確認チェック (CON.C)	女性	0.2	(0.42)	0.06 †
	男性	1.5	(1.84)	
承認 (AC)	女性	1.3	(1.83)	0.21 ns
	男性	3.1	(5.78)	
否認 (NR)	女性	0.3	(1.03)	0.41 ns
	男性	0.1	(0.32)	
明確化要求 (CR)	女性	0.2	(0.42)	0.48 ns
	男性	0.9	(5.78)	
理解チェック (COMP.C)	女性	2.3	(3.4)	0.73 ns
	男性	2.4	(2.17)	
自己発話の修正 (SM)	女性	11.5	(13.49)	0.36 ns
	男性	7.5	(6.7)	
反応要求 (RR)	女性	4	(4.16)	1.00 ns
	男性	3.6	(2.84)	
援助要求 (SR)	女性	0	(0)	-
	男性	0.2	(0.42)	

† p<.10      \* p<.05      \*\* p<.01      ns : not significant

【表 15】情報とり場面意味交渉の出現頻度：ウィルコクソンの順位和検定

発話カテゴリー	性別	平均値	(標準偏差)	p 値
訂正 (EC)	女性	0.2	(0.63)	-
	男性	0.2	(0.63)	
貢献・完成 (CON)	女性	5.2	(6.07)	0.22 ns
	男性	2.3	(1.70)	
確認チェック (CON.C)	女性	9.6	(5.89)	0.18 ns
	男性	17.4	(15.47)	
承認 (AC)	女性	0.7	(0.67)	1.00 ns
	男性	0.7	(0.95)	
否認 (NR)	女性	-	-	-
	男性	-	-	
明確化要求 (CR)	女性	0.6	(0.52)	0.33 ns
	男性	0.9	(0.99)	
理解チェック (COMP.C)	女性	0	(0)	-
	男性	0.3	(0.67)	
自己発話の修正 (SM)	女性	0.9	(0.88)	0.67 ns
	男性	1.3	(3.13)	
反応要求 (RR)	女性	0	(0)	-
	男性	0.1	(0.32)	
援助要求 (SR)	女性	0	(0)	-
	男性	0.2	(0.42)	

† p<.10      \* p<.05      \*\* p<.01      ns : not significant

以上をふまえ、次節では接触場面における母語話者の情報やりとりの発話カテゴリーをまとめる。

#### 4. 接触場面における母語話者の情報やりとりの発話カテゴリー

これまで、一二三（2002）の接触場面の発話カテゴリーから、情報やりとり場面に着目した発話カテゴリーを再構成するために、発話カテゴリーや意味交渉発話の出現頻度分析を行ってきた。以上をまとめると、表 16 のようになる。

【表 16】 接触場面における母語話者の情報やりとりの発話カテゴリー  
情報やり場面の発話カテゴリー

情報提供 (INF)
意味交渉 (NM)
非母語話者のための理解促進発話
非母語話者に対する理解確認発話
情報とり場面の発話カテゴリー
情報要求 (Q)
共有表明 (SE)
あいづち
非母語話者に対する理解表明発話
意味交渉 (NM)
母語話者自身の理解促進発話
非母語話者に対する援助発話

情報やり場面の発話カテゴリーには、上位カテゴリーとして「情報提供」と「意味交渉」を設ける。さらに、「意味交渉」の下位カテゴリーとして、「非母語話者のための理解促進発話」（自己発話の修正、承認・否認）と「非母語話者に対する理解確認発話」（理解チェック、反応要求）を設定する。

次に、情報とり場面の発話カテゴリーには、上位カテゴリーとして「情報要求」、「共有表明」、「意味交渉」を設ける。さらに、「共有表明」の下位カテゴリーとして、「あいづち」「非母語話者に対する理解表明発話」を、意味交渉の下位カテゴリーとして、「母語話者自身の理解促進発話」（確認チェック、明確化要求）と「非母語話者に対する援助発話」（貢献・完成）を設定する。

情報共有のためのタスクの分析から設定した上記の発話カテゴリーは、接触場面におけ

る母語話者の情報やりとりの特徴を表すことができると考える。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、接触場面における情報やりとりの過程に着目し、情報やり場面と情報とり場面における母語話者の言語行動の特徴を記述するための発話カテゴリーを設定することを目的として、同年代の母語話者・非母語話者の情報共有タスク実施時の会話資料分析を行った。

情報やりとりの発話カテゴリー設定にあたっては、一二三 (2002) の発話カテゴリーから「情報の合成・加工」と「無反応」を除き、新たに「共有表明」を加えた。また、「意味交渉」については、両場面で使用される発話機能の違いを分析し、情報やり場面には「非母語話者のための理解促進発話」と「非母語話者に対する理解確認発話」を、情報とり場面には、「母語話者自身の理解促進発話」と「非母語話者に対する援助発話」を設定した。

この発話カテゴリーの設定によって、接触場面における母語話者の情報やり場面、情報とり場面の詳細な記述が可能になると考えられる。この発話カテゴリーを適用して母語話者発話の分析を行うことで、母語話者が非母語話者との情報やりとりをどのように行っているのかを明らかにし、学習者が接触場面において円滑なコミュニケーションを行うために必要な情報を提供できるのではないだろうか。

ただし、本稿で扱った会話資料は大学生・大学院生の二人の会話に限られており、人数も限られているため、今後、この発話カテゴリーの妥当性を検証するためには年齢差やその他の属性の拡充が必要である。また、3人以上の会話場面の分析なども必要であろう。

さらに、母語話者の非母語話者との接触経験の差が発話カテゴリーの項目にどのように影響するかについても検討を加えていきたい。

## 注

1. 母語がロシア語の非母語話者（日本語能力試験2級）以外は、日本語能力試験1級合格者である。また、全員が筑波大学留学生センター日本語補講コースにおいて、「聴解会話7」という聴解会話クラスのうち一番上のコースを録音調査時の2003年1学期(4月～6月)、または2002年3学期(12月～2003年2月)に履修しており、会話レベルはほぼ同等と認められる。
2. 会話の文字化にあたり、BTSJ (Basic Transcription System for Japanese) (宇佐美、1997) を参考に用い、改行は基本的に話者交代のときに行った。また、出現頻度は発話文ではなく、発話単位で集計した。これは、発話文には複数の発話機能が含まれる場合が多く、一発話文内であっても、発話ごとに機能が異なっている例が少ないためである。発話文とは、発話の途中にあいづちなどが入っていても構造的に文を成

し、句点「。」で終わるまでの一連の発話である。

【文字化凡例】

・・・ 語尾が言い淀んだような形になり、文が途中で終了した形になっているもの。

? 疑問文。

??? 相手になんらかの反応を要求する発話。

< > {} < > {} 発話の重なりを表す。

< > 笑いながら発話したものや、笑い等は、< > の中に、<笑いながら>、

<二人で笑い> などのように説明を記す。

3. ウィルコクスの順位和検定：「順序尺度にもとづくデータにも適用可能であるとともに、ノンパラメトリック検定の中では検定力が非常に高く、①外れ値が存在する、②～以上または～以下といった正確な値の得られていないデータがあるため算術平均を求めることができない、③標本の大きさが小さく、分布の正規性が保証されない、などの場合にt検定の代用となる」（森・吉田、2001）。ウィルコクスの順位和検定では2つのグループの順位にもとづいて処理を行うため、各個人の順位が反映される。つまり、ある発話機能について1人が並外れて多くその発話機能を使用している、他の協力者の使用頻度にそれほど差がない場合、その影響が緩和される。

参考文献

- 宇佐美まゆみ（1997）「基本的な文字化の原則（BTSJ）の開発について」『日本人の談話行動のスクリプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』文部科学研究費基盤研究（C）研究成果報告書
- 浦光博・桑原尚史・西田公昭（1986）「対人的相互作用における会話の質的分析」『実験社会心理学研究』26：35-45
- 岡崎敏雄（1994）「コミュニティにおける言語的共生化の一環としての日本語の国際化—日本人と外国人の日本語—」『日本語学』13：62-69
- 御館久里恵（1998）「日本語母語話者の接触場面におけるフォリナー・トークの諸相—非言語行動を含めた談話過程の観察から—」『日本学報』17 大阪大学文学部日本学研究室：111-123
- 佐々木由美（2006）『異文化間コミュニケーションにおける相互作用管理方略』
- 志村明彦（1989）「日本語の Foreigner Talk と日本語教育」『日本語教育』68：204-215
- ネウストブニー, J.V.（1985）『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 一二三朋子（2002）『接触場面における共生的学習の可能性—意識面と発話内容面からの考察—』風間書房
- 堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版

- 増井展子 (2003) 『非母語話者との接触経験によって日本語母語話者のインターアクション的調整に生じる変化—共生言語学習の視点から—』 筑波大学地域研究研究科修士論文
- 村上かおり (1997) 「日本語母語話者の『意味交渉』に非母語話者との接触経験が及ぼす影響—母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて—」『世界の日本語教育』7: 137-155
- 森敏昭・吉田寿夫編 (1990) 『心理学のためのデータ解析テクニカルブック』北大路書房
- ロング、ダニエル (1992) 「日本語によるコミュニケーション—日本語におけるフォリナー・トークを中心に—」『日本語学』11: 24-32
- Larsen-Freeman, D. and Long, M. 1991. *An Introduction to Second Language Acquisition Research*. Longman
- Long, M. 1983a. "Native Speaker/Non-native Speaker Conversation and the Negotiation of Comprehensible Input". *Applied Linguistics* 4.2. :126-141
- Long, M. 1983b. "Linguistic and Conversational Adjustments to Non-native Speakers". *Studies in Second Language Acquisition* 5.2. :177-193